

いちりゅう げいじゆつ しょみん て
「一流の芸術を庶民の手に」

前文

今回は、文化の力で平和を築こう、そして「一流の芸術を庶民の手に」との池田先生の思いから発した、創価の文化運動について紙芝居で発表します。

1 枚目／ミラノ・スカラ座の幕が開いた！（5枚目の絵の裏に貼る）

1981年の9月。日本で初めて世界の至宝である「ミラノ・スカラ座」のオペラの公演が実現しました。スカラ座を日本に招待したのは、池田先生が創立した民音（民主音楽協会）でした。

池田先生はそのときの様子を次のように綴っています。

「幕が開いた。/「スカラ座」の舞台が、目の前にあった。/場所は、ミラノではない。東京である。/イタリアの、いな世界の至宝といわれる「スカラ座」のオペラを日本に呼ぶことは、民音を創立したときからの夢であった。/「魂」の力にあふれた「本物の芸術」を、ぜひとも多くの日本人に！/その「夢」が、目の前で、動き、衣装を着けて、歌っていた」

2 枚目／芸術への思い（1枚目の絵の裏に貼る）

終戦直後の荒れ果てた時代のなかで、若き日の池田先生は、ベートーベンの『運命』などの名曲で心を癒されるなど、「芸術の力」を感じていました。

池田先生が、民音の設立を構想したのは、1961年のアジア5カ国を歴訪する広布旅の途上でした。池田先生のお兄さんが戦死したミャンマーの上空を飛ぶ飛行機の中で、池田先生は「音楽や芸術には、国家の壁はない。真実の世界平和の基盤を築くには、音楽、文化、芸術による人間と人間の交流が最も重要である」と深く思索し、民音の設立を決意しました。

その2年後の1963年10月18日、「文化の交流で平和を」、そして「一流の芸術を庶民の手に」との願いを込めて、民音は創立されました。

3 枚目／スカラ座への公演要請（2 枚目の絵の裏に貼る）

民音は、創立まもないころから、200年の伝統を誇るミラノ・スカラ座に日本公演の要請を続けてきました。

1981年6月にイタリアを訪れた池田先生は、ミラノ・スカラ座のバディーニ総裁と会見しました。

池田先生の「一流の芸術を庶民の手に」との信念に深く共鳴したバディーニ総裁は、民音による日本公演の要請を快諾し、「スカラ座の名に値する最高の公演にします」と語り、両手で包み込むように池田先生の手を握りしめました。池田先生も「万全の態勢でお迎えします」と総裁の熱い思いに答えました。のちに、バディーニ総裁は語っています。「池田先生の熱意と民音を信じました。会長と初めてお会いした時、確信しました。“この方が受け入れてくださるなら、日本公演は成功する”と」

4 枚目／ミラノ・スカラ座の日本初公演（3 枚目の絵の裏に貼る）

「あのミラノ・スカラ座が日本にやって来る！！」待望のスカラ座の日本公演の実現に日本のオペラファンはチケットの前売りに殺到し、大きな話題を呼びました。

1981年9月から行われたスカラ座の公演は、東京、大阪、横浜などで26回行われました。それは、世界を代表するソリストやオーケストラ、合唱団など500名が来日し、大型トラック80台分の舞台装置などを運び込んで行われた、文字どおりの“引っ越し公演”でした。専門家からも「本場でも見られないような、完璧な出来ばえ」と高く評価されました。

この公演を通して、多くの人々が一流の芸術に触れることができたのです。

創立以来、民音は多くの一流の芸術を日本に紹介しており、海外交流国は今や100カ国・地域を超えています。

5 枚目／文化、芸術の力（4 枚目の絵の裏に貼る）

池田先生は、民音のほかにも、様々な文化運動を推進してきました。1983年に設立した東京富士美術館は「世界を語る美術館」をモットーに、海外の著名な美術館の名品を日本に紹介し、海外でも数多くの展覧会を開催するなど、文化の交流に努めてきました。

文化、芸術の力について池田先生は語っています。

「本物の感動の前には、大衆もインテリもない。（中略）全部の垣根をなくしてしまうのが、感動の力である。芸術の魔法である。一流の『美』に触れるとき、だれもが『人間』に立ち戻るのだ。そこに『文化の交流で平和を』と私たちが世界を駆けてきた理由もある」と。

創価の文化運動は、文化、芸術の力で一人一人の平和の心と呼び覚ます「精神の戦い」なのです。